

医療とコンピュータ

Vol.9 No.12

株式会社日本電子出版

<http://www.epj.co.jp/medcom/>

EndNoteで文献整理

多田羅勝義

国立療養所徳島病院小児科

ドクターの日常業務とは？

「言うまでもない。それは診療である。」と、大多数の方は答えるであろう。確かに診療はドクターにとって欠くことのできない日常業務であろう。さて、今回この企画で筆者に与えられたテーマは「EndNoteで文献整理」である。では、この日常業務と文献整理という2つのキーワードをどのように結びつけばよいであろうか。パソコンに向かいまず考えたのはこの点であった。めずらしい疾患の患者さんを受け持ったとしよう。とりあえず自分の専門以外の疾患であれば、教科書にあたるのではないだろうか。さらに詳細を知りたいと思ったらどうするか、文献をあたることになるであろう。そこで文献検索、整理ということが日常業務に大きく関わってくることになる。

文献検索、整理

文献検索についてはテーマの趣旨から外れるのでここでは触れない。この点については伊藤勝氏による本誌の「ホームページで文献検索」などを参照していただきたい。さて、問題の整理である。文献に限らずこの問題は人類の永遠のテーマの1つかもしれない。「確かコピーしておいたはずなのにあの文献はどこだろう。」無くしたと気付かれる文献はまだ幸せである。一度も思い出されること無く埋もれてしまう文献の何と多いことか。そこで整理、管理ということになるのである。ところで、データ量が

多くなる程この整理、管理という問題は深刻になる。そこには当然「パソコンを使って...」という発想が生まれてくる。

Reference Management Software

Reference Management Softwareというジャンルのソフトがある。まさにその名の通りのソフトである。このソフトの話をしようと思う。

さてここでもう一度整理、管理に戻る。

素朴に、「なぜ整理しなければならないのか？」を考えてよう。答えは簡単、「もう一度使うため」である。では、「どのように使うのか」と問われたら？ここで思い出して欲しい。ドクターの日常業務として、「論文を書く」ということがある（あるいはあった）ことを。もしこの業務に無縁であれば、文献管理にReference Management Softwareという特殊なソフトは必要ない。他の汎用データベースソフトで充分である。

論文には必ず参考文献リストの作成が必要である。これは案外たいへんな作業であるが、実はReference Management Softwareはこれを勝手にやってくれるのである。これこそまさにこの特集のテーマ「省力化」以外のなにものでもないのではないか。

EndNoteとは

Reference Management Softwareには何種類かの製品がある

が、日本での使用を考えると、筆者の知る限りまずEndNoteではないと思われる。

筆者がEndNoteを使い初めて7年になる。当初、EndNoteの日本での取扱店は大学生協の関連会社であり、筆者が購入したのも大学生協からであった。非常にユーザーの限定されたソフトであるから、一般のコンピュータショップで見かけることはめったになかった。したがって相談窓口は代理店しかなかったが、対応はまずまずであった。ところが昨年代理店が変わった。さらに製造元のNilesはユーザーに「今後日本語へのサポートはできない」とのメッセージを送ってきた。非常に不安を覚えながら、新しい代理店(ユサコ)の対応をみてきたが、今のところまずまずといったところか。ちょっと安心してEndNoteの紹介を始めよう。

なお、EndNoteは現在バージョン3が販売されている。筆者が実際に使用しているのはバージョン2.2であるが、ここではバージョン3を使って説明する。しかし基本的には旧バージョンも同じである。

EndNoteへの文献入力

もちろん文献を一つ一つキーボードから入力することも可能だ。しかしこれはあくまで補助手段と考えること。「省力化」とうたうのであればやはりオンラインデータベースの利用、CD-ROMデータベースの利用を考えなくてはならない。

実はバージョン3に変わって最も変わったのはオンラインデータベースから直接EndNoteに取り込むことが可能になった点である。

さらにもう一つデータ取り込みに関して大きく変わった点がある。従来のバージョンではデータ取り込みの際EndLinkという翻訳ソフトが必要だったが、バージョン3ではEndNote本体に組み込まれている点だ。

フィルターとは

「省力化」文献入力をおこなう時、最もとまどう点は

フィルターに関してであろう。実際にCD-ROMデータベースで検索してきた文献をEndNoteに取り込み、新しいライブラリーを作りながら説明する。なお、フィルターについての詳細は他文献をみていただきたい。

- (1) EndNote Plusを立ちあげ「File」メニューから「New」を選択する。出てきたダイアログボックスで、新しいライブラリーの名前を付けておく。
- (2) Set Filters Folder
「File」メニューから「Import Filters」、「Set Filters Folder」(図1)を選択する。Filters Folderはどこかと聞いてくるので、EndNoteのフォルダの中にあるFilters Folderの中から適当なフィルターを選択する。適当なという意味は集めてきた文献がどこのメーカーから提供されたものかということだ。例えばSilverPlatter社のMedlineであればMedline (SP)、OVID社のMedlineであればMEDLINE (OVID)といった具合である。
- (3) Import
次にFileメニューから「Import」を選択すると、Import Dialog box (図2) が出てくる。Choose FileではCD-ROMからダウンロードしてきたファイル、Import Optionでは(2)で選択しておいたフィルター

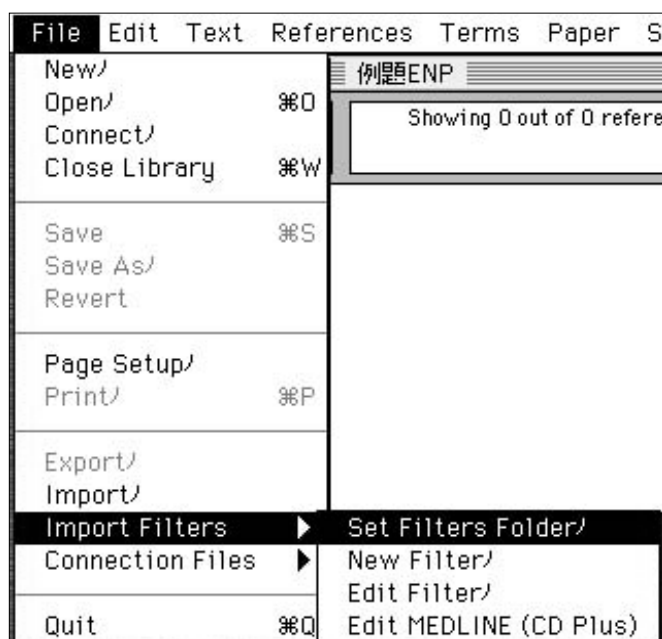


図1 フィルターの設定

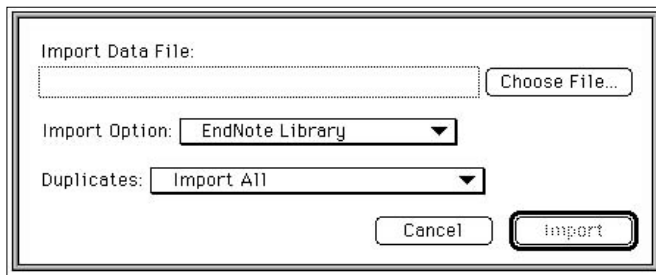


図2 Import Dialog box

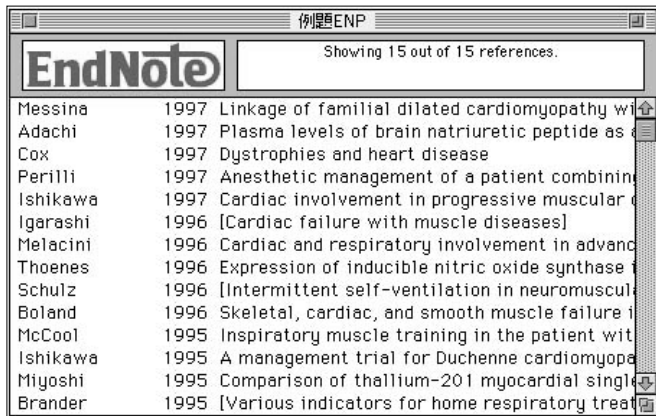


図3 EndNoteの一覧画面

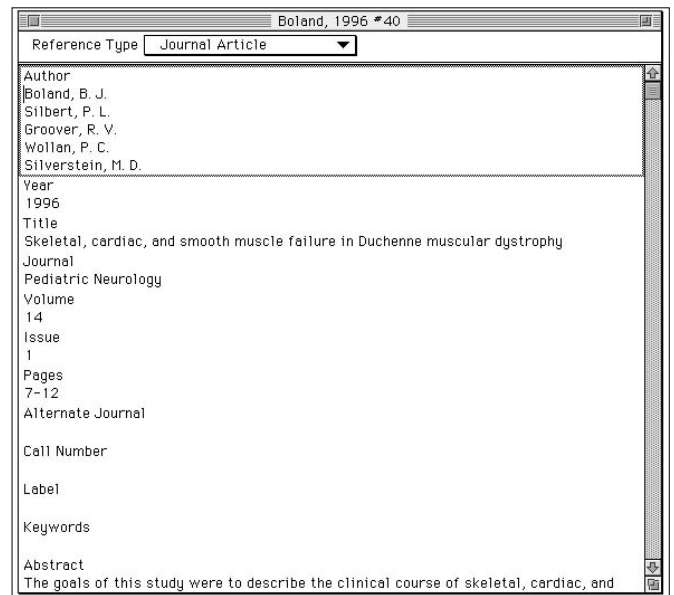


図4 EndNoteの基本画面

はここでは省略するので、他文献を参照していただきたい。

を選ぶ。初めて造ったライブラリーであれば DuplicatesでImport All、既存のライブラリーに文献を付け加える時にはDiscard DuplicationsあるいはImport into Duplicate Libraryを選び、重複文献を避ける。3つの設定が終わったら「Import」ボタンをクリックする。

(4) 一覧画面

EndNoteに取り込まれた文献は図3のように整理される。これは一覧画面と呼ばれ、ここにはFirst Author、発行年、タイトルのみが表示される。一つのライブラリーには32,000件の文献を入力することが可能だが、的を絞った個人ライブラリーの実用性から考えると数百から1,000件程度が適切ではなかろうか。

(5) 基本画面

一覧画面から目的の文献を選択し、ダブルクリックすると基本画面(図4)となる。基本画面とは各文献の内容を示したものである。なお、キーボード入力する場合には「References」メニューから「New」を選ぶとこの基本画面がでてくる。入力に際しては当然いくつかの規則がある。例えば著者名はTatara,Kのように書き1人1行とする等である。詳細

日本語文献データベースの利用

英語文献のみを集め、自分で書く論文も英語論文のみという方はこの項目は必要ない。しかし大多数の方は日本語文献も扱いたいし、日本語論文作成時にもEndNoteを利用したいと考えているのではなかろうか。そこで代表的日本語文献データベースの医学中央雑誌CD-ROMデータベースの利用方法を説明する。

(1) RTの利用

医学中央雑誌CD-ROMデータベースから集めてきた文献をまずEndNoteに読み込める形式に変換する必要があるが、これはEndNoteだけではできない。讃岐美智義氏作成のRT(NIFTYで入手可能)等のソフトが必要となる。RTを図5に示したが、ここで変換先ファイルをRefer/Biblxとしておく。この作業の後EndNoteへ取り込むのであるが、その際は図2のImport OptionをRefer/Biblxとする。

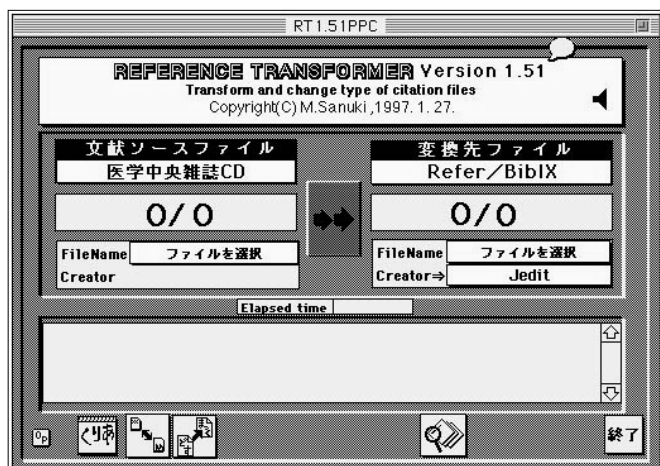


図5 RT (讃岐美智義氏作成)

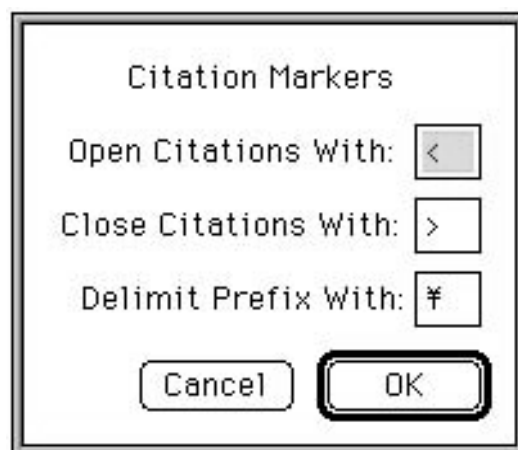


図6 引用箇所の判定方式

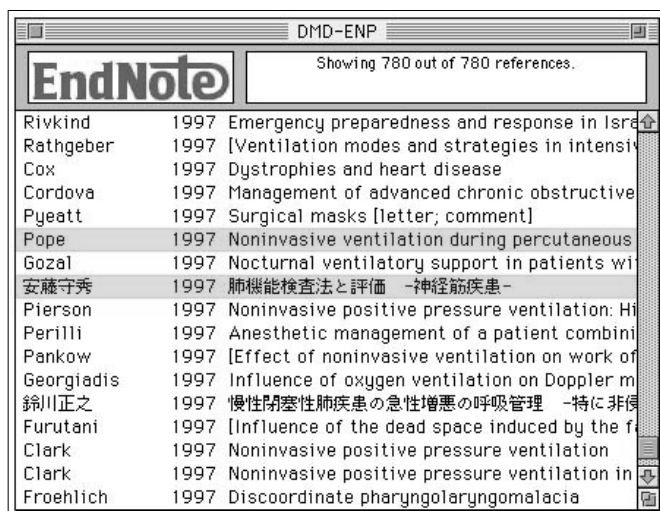


図7 引用文献を選択

EndNoteで参考文献リスト作成

さて、EndNoteを使って自分のライブラリは完成した。ではライブラリを利用して参考論文リストを作ってみることにする。この作業を「省力化」しようというのが今回の最重要課題だ。

ワープロとEndNote Plus

ワープロソフトは基本的にはどんなものでもかまわない。最近のワープロソフトは日本語、英語両用のものが多いが、EndNote使用の際はこのようなバイリンガルワープロの場合まだバグがあるようだ。筆者はいまだに英語

ワープロはMS Word5.1を使用しているが、このような米国製ワープロとEndNoteとはまことに相性がよい。例えば日本語ワープロEG Wordとの相性と比較すると、一段も二段も「省力化」が進んでいる。

文献引用箇所へコピーアンドペースト

最初におこなう作業は「Citation Makers (引用箇所の判定方式)」の確認だ。「引用箇所の判定方式」は日本語論文が英語論文かで違って来る。日本語論文の場合はまずEndNote Plusの「Edit」メニューから「Citation Makers」を選択する。(図6)そこで日本語論文の場合はOpen Citations with (開始文字) Close Citations with (引用の終了文字)をそれぞれ「<」>」、英文論文の時は「[」\]」とする。次にワープロとEndNoteを同時に開く。なお、これからの説明はEG Wordを使った場合の説明をする。

まずEndNote Plusのライブラリから、引用する文献を選択する。図7ではPopeの論文の他に安藤の論文も選択している。このようにEndNote Plusの「一覧画面」で離れた所にある複数の論文を選択するためには、Commandキーを押しながらクリックする。選択後これをコピーする。次にワープロで作成中の論文の文献引用箇所へこれをペーストする。論文上でペーストされた文献は、<Pope, 1997 #1369; 安藤守秀, 1997 #1330>のように表示される。

このようにして次々と引用文献のコピーアンドペース

トをくりかえす。

論文の保存

EG Wordなど日本語ワープロを使うのであれば論文の保存は原則としてテキスト保存にしておかななくてはならない。保存後はワープロソフトを終了しておく。

投稿誌の文献スタイルにあわせる

ご存じのように、雑誌によって文献リストのスタイルは違ってくる。EndNoteには代表的な雑誌のスタイルが用意されている。しかしこれらは超有名誌ばかりで、自分の投稿しようと思っている雑誌名がこのリストにある場合はまずないと思ってよい。その場合にはVancouverスタイルを使う。たいいていの医学雑誌のスタイルはVancouverスタイルに準じているので、Vancouverスタイルそのものかこれを若干手直しすれば間に合う。ちなみにVancouverスタイルとは次のようなスタイルである。

「1. Tatara K, Murata M, Itoh K, Kazuma N, Kondo C. Management of severe coronary sequelae of Kawasaki disease. American Heart Journal 1996;131(3):576-81.」

次にスタイルを変更する方法を示す。

スタイルの変更

(1) Styleメニューから「Edit Vancouver」を選択

ここでは Vancouverスタイルを手直ししてみる。そ

こでまず「Vancouver」を選択しておくとも自動的にStyleメニューの2行目が「Edit Vancouver」と変わる。(図8)

(2) Citation Templateの設定

「Edit Vancouver」を選択すると、図9のような編集画面が表れる。この画面の一番上にある「Citation」とは論文中の引用文献の表示方法のことである。デフォルトの設定では、論文中に「As some pathologists (9, 10) have reported,」のように表示される。「As...pathologists^{9, 10}....」のように変更するのであれば、「Bibliography Number)」を選択しておき、「Text」メニューの「Style」で「Superscript」を選ぶ。

(3) Author List

雑誌を参考文献とする場合を説明する。まず編集画面で「Journal Article」を選択する。「Edit Vancouver」を選択した段階でメニューバーにあらたに「Edit Styles」という項目が表れる。ここで「Author List」を選ぶと、図10のような「Author List」ダイアログボックスがあらわれる。デフォルトでは「Abbreviation (省略形)」で「7名以上の著者の場合は3名まで記載し、4番目以下は省略し et al. とする」となっているが、もし著者全員を載せるのであれば、「Abbreviation」の欄で、「100 or more authors. List 100 authors.」とでもしておけば省略されることはない。

(4) 発行年を最後に

Vancouverスタイルでは出版年は雑誌名の後につく。項目の順序を変えるにはまず編集画面で「Journal

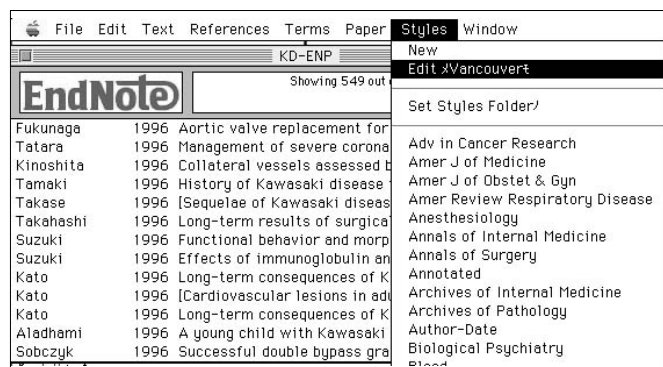


図8 スタイル変更

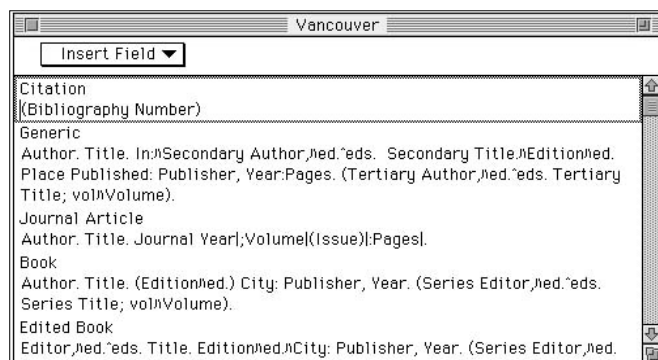


図9 Vancouverスタイルの変更

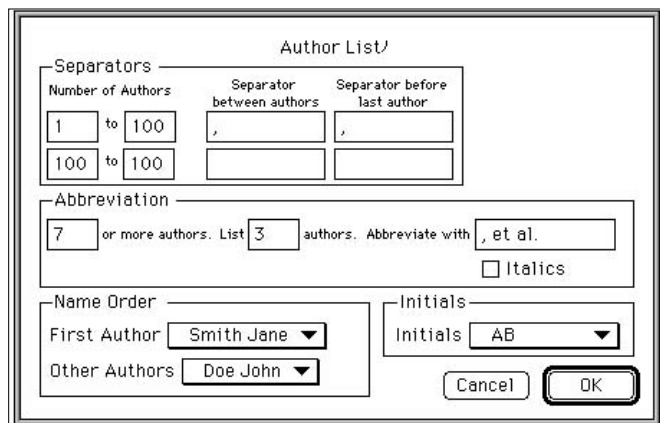


図10 Author List

Article」を選択し、カットアンドペーストで発行年の順序を変更する。発行年以外の項目の順序変更も同様にできる。

このようにスタイルを変更した場合は閉じる前に変更点を保存するかどうかを聞かれるが、原則として変更したスタイルは名前を変えて保存する方がよい。

論文を開く

EndNote Plusのメニューバー「Paper」から「Scan Paper」を選択する。EG Wordなどのワープロソフトはこのダイアログボックスにテキスト保存したものしかあらわれない。

論文をフォーマット

メニューバー「Paper」から「Format」を選択する。その後、でてきたダイアログボックスで保存するが、参考文献リスト付きの新しい論文名は、元の論文の名前にスタイル名を付けた形で"○○○-Vancouver"となる。"○○○-Vancouver"を開いてみると、論文の最後に参考文献リストが自動的にできあがっている。

まさに論文作成（参考文献リスト作成）においてこれ以上の「省力化」は無いのではなかろうか。

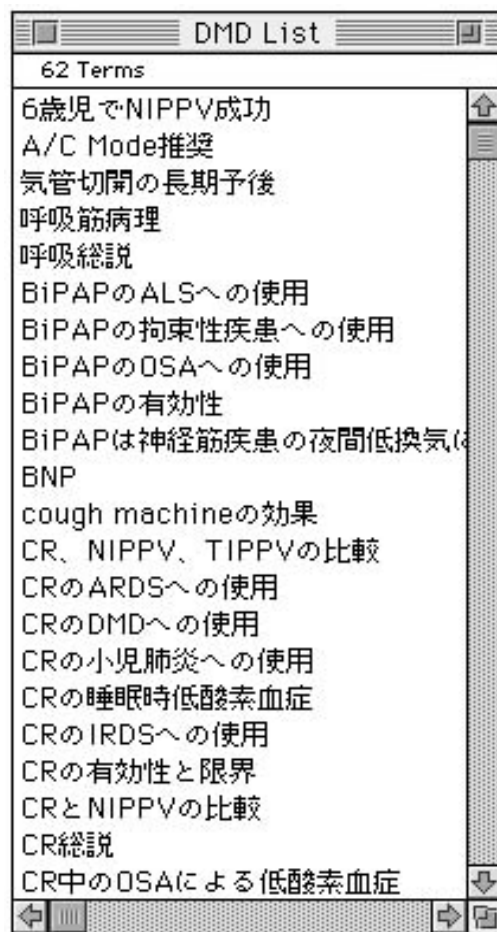


図11 用語リスト

EndNoteによる日常業務「省力化」プラスワン

EndNoteのメニューバーに「Terms」がつけ加わったのはバージョン2からだ。当初筆者はこの機能の活用がよくわからなかった。「無用の長物」との評価を下したこともあった。ところが使ってみるとこれがなかなかのすぐれものであることがわかった。

Term List（用語リスト）とは

われわれが論文を読む時に、この論文のこういう所を自分の論文に引用しようと考えながら読むことがある。例えば「BiPAPの拘束性疾患への使用」の論文といった具合だ。この場合、その論文のキーワードでは不十分な事

が多い。そこで用語リストに「BiPAPの拘束性疾患への使用、大成功」と、そのままのかたちで登録しておく。つまり論文を読んだ時、ポイントをメモ書きするのと同じ事を用語リストでおこなうわけだ。この作業をこまめにおこなっていると自分の論文作成の際ずいぶん役に立つ。登録用語数に制限はなく、できるだけ具体的に書いておくことが有効活用のコツである。

Term Listの活用

(1) リストの新規作成

メニューバー「Terms」から「New List」を選択する。デフォルトでは著者、雑誌名、キーワードの用語リストが用意されている。またこれらはそれぞれ著者、雑誌名、キーワードの各項目とリンクされており、入力の際に、コマンドキーを押しながら1を押すことによりすぐにリンクした「用語リスト」が開くようになっている。他の項目に用語リストを作ることもできるが、まずキーワード項目の利用をおすすめする。

(2) 新規用語の登録

リストを開いた状態で「Terms」メニューから「New Term」を選択する。でてきた登録ウインドウで登録用語を入力する。すでに登録してある用語を入力すると、「用語の保存」ボタンが灰色のまま二重登録できないようになっている。

(3) 用語リストの利用

「Terms」メニューから「Open List」を選択し、でてきたダイアログボックスで用語リストを選択し、「Open」をクリックする。ここではDMDリストと名付けられた用語リストを示す。(図11) このリストに一覧された用語から引用する参考文献を選択し、後は検索機能を利用して文献を呼び出す。

「省力化」という考え方は非常に幅広い意味を持つかもしれないが、根本には「楽をしたい」という期待があることは間違いない。その意味からすれば、筆者にとってReference Management Softwareは充分その期待に応えてくれたソフトの1つと言える。

文献

- 多田羅勝義 誰でも使えるコンピュータ 論文作成(2)
小児科診療 61;965-968, 1998
- 多田羅勝義 誰でも使えるコンピュータ 論文作成(3)
小児科診療 61;1153-1158, 1998
- 多田羅勝義 誰でも使えるコンピュータ 論文作成(4)
小児科診療 61;1272-1278, 1998

EndNote Plusのまとめ

そもそもドクターはなぜコンピュータを使うのか。まずは業務の「省力化」が目的ではなかろうか。業務の